

全体研修会 (4A 算数)

家庭訪問も終わり、少しは落ち着いてくるころでしょうか。ここから、授業研も少しずつ増えてきます。授業について深く考えたり、周りの先生方と話したりすることで、教師力を向上していきましょう。さて、だいぶだいぶ遅くなりましたが、みなさん全体研ありがとうございました。今回の授業を通して先生方から学ばせていただいたことを中心にまとめさせていただきたいと思います。

提案授業では、算数科の折れ線グラフと表の授業でした。この全体研から学んだことを『課題』『子どもの姿』『学ぶとは』の3つの観点で整理していきたいと思います。

□課題について

課題について事後研で先生方からいただいた意見は以下の通りです。

- 子どもたちが考えたくなる課題だった。
- 日常生活につながる課題であった。
- 課題につながりはあったのか。
- そもそも課題とめあての違いは何か。

先生方の意見からやはり子どもが夢中になって学び続けられるような課題を設定することは、必要だと改めて感じました。しかし、同時にただ考え続けたらよいのではなく、子どもたちは何を考え続けているのか、教師側が何を考えさせたいのか明確にして課題をつくらないと、ただの算数クイズになってしまう恐れもあると思います。そこが何度課題づくりをしても難しいなと感じるところです。(詳しくは次の『子どもの姿』でまとめたいと思います)

また共有の課題とジャンプの課題のつながりについてもお話がありました。授業をつくっていくなかで、共有の課題とジャンプの課題のつながりについて意識して課題をつくっていたつもりでしたが、そのつながりが見えにくかったということで、つながりがあっても、こちらがつなげてあげなければ、子どもたちがジャンプの課題で困ったときに共有の課題でおさえたことに戻ることはなかなか難しいと感じました。本時であれば、子どもたちは共有の課題で、ドッジボールを選んだ子の合計の方が多くけど、20分休みという条件をつけたらおにごっこを選んだ子の方が多いという話がありました。この話をしている子たちは、表の意味を理解している子たちです。またジャンプの課題で多くの子が悩んでいた10という数についてですが、これは共有の課題のドッジボールを選んだ子の合計と同じ質の数です。そこで、共有の課題にこちらがもどしてあげれば、子どもたちの中で、繋がった子たちもいたのではないかと思います。

最後に課題とめあてについてです。子どもたちに授業の最初に提示することが多いと思いますが、提示するものが課題とめあてで混同しているとのことでした。事後研であった中では、『課題』とは授業後にできたら○で、子どもたちが考え続けるものだというお話でした。本時でいうとそれは「それぞれの説明書をいくつ用意したらいいのかな」があてはまると考えられます。また『めあて』に関して事後研で今回は話すことができませんでしたが、つけたい力と関係してくるのではないかと考えます。本時でもしめあてを提示するのであれば、「表の数字の意味についてかんがえよう」になるの

ではないかと思います。私も課題とめあてについてもっと勉強する必要があると思いますが、現地点で私は、めあてではなく課題を提示するべきだと思っています。課題に取り組み続ける中で、自然とつきたい力がつくような課題を設定していくことを意識して私は、課題づくりをしています。

□子どもの姿について

次に子どもの姿についてです。子どもの姿について出た意見は以下の通りです。

○課題に向き合う姿があった。

○友だちに頼る頼られる姿があった。

課題に向き合う姿については、さきほども少し書きましたが、子どもたちは本当に考え続けていたのではないかと思います。必死に頭を抱えて悩んでいる姿、友だちの分からなさを出し合っている姿が見られました。しかし、その姿が見られたらそれだけで〇ではなく、子どもたちが悩み考え続けていることが、果たして教材のおもしろさに触れているのかをこちら側が見とっていくことが重要だと改めて感じました。本時の共有の課題の中で、子どもたちの会話の中に「かわいそうだから」「やっぱり全員が楽しめた方がいいから」という発言がありました。子どもたちにとっては、「2年生と次に遊ぶなら」という課題に取り組んでいることに変わりはないのですが、2年生の気持ちを踏まえて考え始めると、私が設定した教材の中心となるおもしろさからは、ずれてしまいます。そのため、今回はさきほど紹介したような質の発言が増えてきたと思ったところでジャンプの課題にうつりました。こちらが、おもしろさに触れている子どもの姿を明確にもっておくことで、授業内での見とりに繋がっていきます。

□学ぶとは

最後に学ぶということについてです。

授業の中で見とる姿は、子どもたちの学びが深まった姿です。私もそうですが、子どもたちがグループで分からなさを出し合って、悩んでいる姿が出ていればそれでOKというわけではないと思います。教師は、その分からなさについて、考えていくことで子どもたちにどのような力がついたのかまで、見とっていく必要があると思います。本時であれば、子どもたちが表の中にある1つ1つの数字の意味について、課題を通して理解することができたのかが、見とるポイントになってくると思います。

子どもたちが、この授業が終わったあとに何ができていたらいいのか、ゴールイメージを持って授業に臨むこと、そして、授業後にそこに子どもたちは果てして到達していたのかを、常に見ていき考えていかなければいけないなと思いました。

今回は、3つの観点で整理をしました。授業をしていく中で、または見ていく中で、こちらが何を見るのかを具体的に持つておかなければ、授業を見ていても、子どもたちの学びが成立しているのか、深まったポイントはどこなのかを見とることは難しいと思います。今日の山中先生の授業を見せていただく中で、自分が見る視点を明確に持つことができるかどうか重要になってくると思います。そして、みなさんがどの視点でどう見たのか、共有していくことで、教師力の向上につなげていきましょう。(文責 甫本)

算数の授業では、その時間のはじめに（または前時の終わりに）ほとんどの子どもたちを同じ土台に乗せてやるのが大事だと思います。今日の授業の中では、二次元表の見方を共有の課題の中でふり返ることができるよかったです。

学びを保障することの大切さを改めて感じた。難しい課題にも根気強く取り組む子どもたちの姿が印象的だった。共有の課題については分かってきたつもりだったが、ジャンプの課題の設定は難しいと感じた。共有がより理解できる応用の課題作りを考えていきたい。